

**学校法人藤田学園  
藤田保健衛生大学短期大学  
機関別評価結果**

**平成 20 年 3 月 19 日**

**財団法人短期大学基準協会**

## 藤田保健衛生大学短期大学の概要

設置者	学校法人 藤田学園
理事長名	山路 正雄
学長名	磯村 源蔵
A L O	寺平 良治
開設年月日	昭和41年4月1日
所在地	愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1番地98

## 設置学科および入学定員(募集停止を除く)

学科	専攻	入学定員
衛生技術科		80
医療情報技術科		65
	合計	145

## 専攻科および入学定員(募集停止を除く)

専攻科	専攻	入学定員
専攻科	臨床工学技術専攻	20
	合計	20

## 通信教育および入学定員(募集停止を除く)

なし

## 機関別評価結果

藤田保健衛生大学短期大学は、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていることから、平成 20 年 3 月 19 日付で適格と認める。

## 機関別評価結果の事由

### 1. 総評

平成 18 年 6 月 21 日付で当該短期大学からの申請を受け、本協会は第三者評価を行ったところであるが、評価の結果、当該短期大学は、自らの掲げる教育理念の実現および教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていると判断した。

上記の判断に至った事由は、おおよそ次の通りである。

創設者は、約半世紀前に、「獨創一理」という標語に集約した建学の精神をもって「良き医療人」の育成を企図し学園を創設した。建学の精神・教育理念は、教職員に周知され、学生に対しても、これを確認させ医療人としての自覚を涵養している。当該短期大学の教育の内容は、この精神・理念・目標を達成するために編成され、そのために最大限の努力をしている。

教育の内容は適切に編成され、教育目標に沿った特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）「実践力と創造力を体得する学際的卒業研究」ならびに職業意識の自覚・高揚を目指す科目「アSEMBリ」を実施し、日々努力している。

教育の内容を効果的に推進するために、短期大学設置基準を上回る教員数を確保している。

また教育環境としては、授業用の講義室などの整備、設備は学生の学習に必要な要件を充たしたものである。図書館およびビジュアルセンターについては、その環境条件などは満足すべきものであり、学生および教員の学習や研究に充分対応したものとなっている。

教育目標の達成度と教育の効果は、全般的に適切と判断される。国家試験などの合格率は、極めて高い。また四年制大学への編入学希望に対しても、個別に対応するなどしている。また専門分野への就職は、すべての学科で極めて高く、また卒業生の就職先の評価も、おおむね良好である。

当該短期大学の専門性をいかした講演会や公開講座などの地域活動が行われており、学生も医療ボランティアなどで地域に貢献している。

理事長のリーダーシップの下に、適切な法人運営が行われている。学長は適切にリーダーシップを発揮しており、教授会と理事会との意思疎通もよい。

平成 26 年度の創立 50 周年に向けてグランドデザインを策定し、それを実現するための財務中・長期計画を策定している。

自己点検・評価は、これまで 3 回実施し平成 16～17 年度には相互評価も実施し、評

価実施体制は構築されている。さらに、自己点検・評価に基づいて工夫改善の努力を積み重ねている。

## 2. 三つの意見

### (1) 特に優れた試みと評価できる事項

評価領域Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

- 建学の精神「獨創一理」は大学発足以来、そのコンセプトは変わることのないものとして理解され、新棟（獨創一理祈念館）建設に当たり定礎として明記されている。

評価領域Ⅱ 教育の内容

- 「良き医療人」に必要な「実践力と創造力を体得する学際的卒業研究」が特色 GP に採択され、優れた成果をあげている。
- 開学以来継続されている学科共通必修科目「アセンブリ」は、将来の医療人としての職業意識を高めるとともに、学科・学年を越えた学生間の協調性などを涵養するのに役立っている。

評価領域Ⅲ 教育の実施体制

- 短期大学設置基準で定める専任教員数を上回る教員が配置されている。

評価領域Ⅴ 学生支援

- 入学前に、高等学校の理科の復習や読書感想文の提出を課すなど、入学予定者が短期大学生生活に早期にとけ込めるよう支援している。
- 二人担任制により、学業相談、生活相談、進路相談など、多方面にわたる支援をしている。

評価領域Ⅵ 研究

- 専任教員による『医学領域における臨床検査学入門』の出版は、教育研究の成果を社会に還元している。

評価領域Ⅶ 社会的活動

- 当該短期大学の専門性をいかして、講演会、公開講座、学生による医療ボランティアなどの地域活動に積極的に取り組んでいる。

評価領域Ⅷ 管理運営

- 健康管理室を設置し、学生のみならず、職員の健康管理に留意している。

評価領域Ⅸ 財務

- 年度後半に、多数回にわたって、公認会計士による月次決算の監査が行われている。

る。

#### 評価領域Ⅹ 改革・改善

- 自己点検・評価を効率よく実施するとともに、全学的な共通理解の促進や評価結果に基づく改善努力に向けて、学内各種委員会が充分機能している。
- 平成 13 年度以来、自己点検・評価および相互評価が実施され、評価実施体制が着実に形成されている。

### (2) 向上・充実のための課題

#### 評価領域Ⅱ 教育の内容

- シラバスにおける授業目的や内容説明の緻密さに専任教員と兼任教員（非常勤講師）との間で若干の差が認められるので、兼任教員などのシラバス記載の充実が必要である。

#### 評価領域Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

- 卒業生との接触、同窓会との連携などは、教育の実績や効果の確認に必要であり、今後の具体的な検討が望まれる。
- 教育改善のためには編入先からの評価についても意見を聴取することが望ましい。

#### 評価領域Ⅷ 管理運営

- 学内の研修会の企画や学外の研修会への派遣など、スタッフ・ディベロップメント（SD）活動の活発化が望まれる。

### (3) 早急に改善を要すると判断される事項

なし

### 3. 領域別評価結果

	評価領域	評価結果
評価領域Ⅰ	建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標	合
評価領域Ⅱ	教育の内容	合
評価領域Ⅲ	教育の実施体制	合
評価領域Ⅳ	教育目標の達成度と教育の効果	合
評価領域Ⅴ	学生支援	合
評価領域Ⅵ	研究	合
評価領域Ⅶ	社会的活動	合
評価領域Ⅷ	管理運営	合
評価領域Ⅸ	財務	合
評価領域Ⅹ	改革・改善	合

#### 評価領域Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

創設者は、約半世紀前に学園を設立するに当たり、「独断や偏見を排した柔軟で創造力溢れる発想を堅持して普遍的な真理探究に邁進する個性豊かな人格形成」を意図した「獨創一理」に集約された建学の精神をもって「良き医療人」の育成を企図した。

建学の精神・教育理念の教職員への周知理解はもとより、学生に対しては、新入生ガイダンスを始めとして、臨床検査業務体験実習や施設見学のオリエンテーション、また病院実習の際、さらには卒業研究ガイダンスの折にも、この精神・理念の骨子を確認させ医療人としての自覚を涵養している。

新棟建設に当たっては、建学の精神を明記する定礎を設置するなど、一層の理念の普及に努めている。

#### 評価領域Ⅱ 教育の内容

教育の内容は、建学の精神ならびに教育理念・目標を達成するために編成され、そのために最大限の努力をしている。衛生技術科、医療情報技術科および専攻科臨床工学技術専攻の教育課程は、それぞれ修業年限の3年および1年の中で無理のない、無駄のない編成の工夫がされている。また、学生のほとんどが卒業後の進路として「医療人」を選択し、そのために必要な資格、「臨床検査技師」、「診療情報管理士」および「臨床工学技士」の取得を目指して学習に意欲を燃やしている。

教育目標に照準を合わせた特色 GP「卒業研究」、ならびに職業意識の自覚・高揚を目指す科目「アセンブリ」を実施している。

教育課程の実施にあたっては、少人数のクラス編成および内容の充実したシラバスが、学生の学習意欲の向上のみならず、教員の授業責任の重要性を喚起することにも役立っている。

授業内容や教育方法は、半期ごとの学生によるアンケートを中心に改善を重ねている。

### 評価領域Ⅲ 教育の実施体制

教育の内容を効果的に推進するために、両学科ならびに専攻科の教員組織の充実も図っている。すなわち、短期大学設置基準を上回る教員数が確保されており、教授、准教授、講師、助教の構成割合と年齢構成もバランスがとれている。また教員の採用と昇任人事は、選考規程に基づき適切な選考過程で行われている。

教育環境としては、校地、校舎の面積に問題はないが、やや老朽化が認められ、また、学生の休憩場所が手狭の感がある。これらの点については、拡充計画が検討されている。なお、授業用の講義室などの整備、設備は充分で、学生の学習に必要な要件を充たしたものである。

図書館およびビジュアルセンターについては、その環境条件などは満足すべきものであり、水準を超える蔵書数、学習用機材、AV 資料、情報サービスシステムも整い、学生および教員の学習や研究に充分対応したものとなっている。

### 評価領域Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

成績評価は筆記試験などで総合的になされており、授業の単位の認定、取得の状況、学生の満足度、授業評価のいずれも良好であることから、教育目標の達成度と教育の効果は、全般的に適切と判断される。退学、休学、留年などの割合は低く妥当な範囲であり、学生に対する種々の支援やケアは、二人担任制やカリキュラムの改定などにより対応している。国家試験などの合格率は、極めて高く、また編入学希望に対しても、個別に対応している。専門分野への就職は、すべての学科で極めて高く、また卒業生の就職先の評価もおおむね良好である。現在のところ、教育の実績や効果を確認するための卒業生との接触、同窓会との連携などはなされていないが、今後の検討が望まれる。「良き医療人」の育成を目的とした「アセンブリ」と「卒業研究」は特に優れた試みとして評価できる。

### 評価領域Ⅴ 学生支援

二人担任制で学生の指導・支援に当たるなど手厚い対応をしている。入学する前から受験生や入学予定者と積極的に関わるなど、短期大学の教育方針の具現化に早期から努めている。学習支援も教員の熱意で行われている。しかしながら、短期大学全体の組織的対応は充分とはいえないので、担任教員の熱意、力量によって差が出やすいのではという危惧もある。

進路指導も充分で、専門性の高い教育内容も反映して就職率は高い。学生も全体的に真面目に学業に取り組んでいる。各専門分野における国家試験の重みと、それに伴う学業の専門性の内容から、留学生、社会人、障害者などの入学希望者は少ない。それ

ゆえ、多様な学生に対する特別な支援の制度がない。

#### 評価領域Ⅵ 研究

著作数、論文数、学会などの発表数および国際的活動や社会的活動などは、全体的に良好で、その研究活動状況は、年報として出版、公開されている。研究経費は、教員研究費規程として整備され、教員各自の所属学会、藤田学園医学会での発表、投稿もできる環境にある。研究に関わる機器、備品、図書など、および研究室・実験室は、おおむね確保・整備され、さらに併設の四年制大学、研究所で研究生として研究・実験できるなど、学園ネットワークを活用できる恵まれた研究環境が整備されている。

専任教員による『医学領域における臨床検査学入門』の出版は、教育研究の結果を社会還元する優れた試みとして評価できる。教員室、研究室、研修室などの整備および研究時間の確保は、教育研究を進める上で重要な要因であり一層の充実が求められる。

#### 評価領域Ⅶ 社会的活動

当該短期大学の専門性をいかした講演会や公開講座などの地域活動が活発に行われている。学生も医療ボランティアなどで地域に貢献している。地域交流についての組織・制度の整備は充分でない面もあるが、地域貢献への意欲は高く、実績も有する。

国際交流については実績がほとんどない。資格取得を主たるねらいとする教育活動上は必要性を認識しないのであろうが、研究の深化や情報の収集の点では有意義である。今後の検討を期待する。

#### 評価領域Ⅷ 管理運営

理事長は常勤ではないが度々出校し、かつ寄附行為に基づき理事長を補佐する常務理事を置いて、リーダーシップを十分に発揮できる体制になっており、その下で、理事会は理事構成もバランスよく、原則毎月一回開催され、出席率は常に 90～100%と高い。

また、寄附行為施行細則に基づく常勤理事で構成される常務会も毎月開催され、適切な法人運営を行っている。監事は理事会・評議員会に毎回出席し、公認会計士との意見交換も行い、監事機能を果たしている。

学長は、併設の四年制大学との兼務ではなく、短期大学専任で学内諸事情にも明るく、適切に短期大学を運営している。教授会は学長のリーダーシップの下に理事会との意思疎通もよい。

事務組織は学校法人・併設の四年制大学と連携して十分に機能している。

法人運営、短期大学運営に関する諸規程は、やや簡潔すぎるきらいがあるが、不足無く制定され、柔軟性、即応性をもって運営されている。



## 評価領域Ⅸ 財務

学校法人の収支は病院収入を軸に良好に推移しており、短期大学部門も1年を除き消費収入超過である。支出超過となった1年も帰属収支では収入超過である。

平成26年の創立50周年に向けてグランドデザインを策定し、それを実現するための財務中・長期計画を策定している。

年度後半は、18回延べ72日間の公認会計士による監査が行われ、監事にも報告されている。

資金運用については、複数の担当者によりリスクと安全性のバランスを取りながら慎重になされている。

## 評価領域Ⅹ 改革・改善

自己点検・評価の実施に着手したのは平成13年度であり、これまで3回の自己点検・評価を実施し、平成16～17年度には相互評価も実施され、評価実施体制は着実に形成されている。

これまでの自己点検・評価の都度、工夫改善され、回数を増すごとに評価実施結果の効果有らしめるよう、積み上げられてきている。

例えば、最初の自己点検・評価は「問題なく運営されている」という色彩の強いものであったことから、次回の評価に当たって「問題点を積極的に洗い出し、分析・評価して改善提案を出すこと」に努めており、課題の改善などに役立てている。